

幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会

I 目的

幼稚園の教育課程編成及び実施に伴う諸課題並びに幼稚園を取り巻く諸課題についての専門的な講義や研究協議等を行い、教職員の指導力を高め、幼稚園教育の振興・充実を図るため、幼稚園教育課程等神奈川県研究協議会を開催する。

II 日程

第1日：平成30年7月25日(水) 13時30分～17時00分

会場：かながわ県民センター 2階ホール

13:00	受付
13:30	開会・挨拶 神奈川県教育局支援部子ども教育支援課 課長 宮村 進一
13:40	講演「幼稚園教育要領等の改訂を踏まえた今後の幼児教育の在り方～幼児期に育てたい資質・能力について～」 講師 文部科学省初等中等教育局 視学官 湯川 秀樹 氏
15:10	質疑応答 (10分)
15:20	休憩・移動 (15分)
15:35	グループ協議 協議主題「幼児期に育てたい資質・能力とは」 *学びあいのグループ協議 1グループ各5～6人 *15分×3クール
16:20	全体報告
16:50	閉会・事務連絡

第2日：平成30年7月26日(木) 10時00分～17時00分

会場：【全体会】かながわ県民センター 2階ホール

【分科会】アットビジネスセンター横浜西口駅前

9:30	受付		
10:00	開会・挨拶 神奈川県教育局支援部子ども教育支援課 教育指導GL 下反 達二		
10:10	講演「保育の質を高める教師の役割」 講師 鎌倉女子大学短期大学部 教授 佐藤 康富 氏		
11:50	質疑応答 謝辞		
12:00	一昼休みー		
13:30	分科会受付		
13:45	挨拶／運営委員紹介等		
14:00	提案 (30分)		
分科会	1 (協議主題2)	2 (協議主題4)	3 (協議主題6)
提案園	相模原市立城山幼稚園	秦野市立ひろはたこども園	大師幼稚園
14:30	質疑応答		
15:00	グループ協議・協議題説明		
15:40	各分科会内での全体報告		
16:00	指導助言		
16:15	全体での情報交換		
16:30	閉会 (各分科会ごと)		

Ⅲ 分科会

1 (協議主題 2)	幼児理解に基づいた評価の在り方について
2 (協議主題 4)	障害のある幼児などへの指導や、障害のある幼児児童生徒との「交流及び共同学習」の推進について
3 (協議主題 6)	幼稚園における教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動について

Ⅳ 運営委員

分科会 1 (協議主題 2)	所属	職名	氏名
全体運営委員	大磯町立大磯幼稚園	園長	原田 ゆう子
指導助言者	平塚市港こども園	園長	松田 節子
提案者	相模原市立城山幼稚園	主査	清水 昭子
記録者	清川村立清川幼稚園	主任	平田 直美

分科会 2 (協議主題 4)	所属	職名	氏名
全体運営委員	南足柄市立南足柄幼稚園	園長	石川 りえ
指導助言者	秦野市立しぶさわこども園	園長	府川 宏子
提案者	秦野市立ひろはたこども園	保育教諭	荒木 絵里子
記録者	秦野市立みなみがおか幼稚園	教頭	大塚 政美

分科会 3 (協議主題 6)	所属	職名	氏名
全体運営委員	南横須賀幼稚園	園長	長澤 英子
指導助言者	横浜隼人幼稚園	園長	水越 美果
提案者	大師幼稚園	副園長	勝浦 芳子
記録者	大師幼稚園	教務主任	福島 幸子

V 分科会の記録

平成 30 年度幼稚園教育理解推進事業 (神奈川県協議会)
研究成果の要旨

分科会 1 <協議主題 2 >	幼児理解に基づいた評価の在り方について
--------------------	---------------------

1 提案内容 提案 相模原市立城山幼稚園 主査 清水 昭子

(1) 研究主題のとらえかた

平成30年度から施行された新幼稚園教育要領では、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示されている。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を育てていくためには、幼児が身近な環境や遊びに興味や関心をもち、自ら関わっていくことができるような環境を構成することが大切である。幼児が身近な人との関わりを深めながら身の回りのものに親しみ様々な関わりを通して、一人一人が自分らしさを発揮し、自己肯定感を育てていくことが必要である。幼児の「今」を丁寧に見つめ、多面的にとらえたり、ありのままの姿を可視化したりすることで、幼児理解が深められるのではないかと考えた。

(2) 研究の方法及び研究の重点

幼児一人一人のよさやその子なりの発達過程を見取り、可能性を把握して、指導に活かせるような評価であることを職員間で共通理解する。園での幼児の姿を丁寧に伝えることで幼児理解や保護者との信頼関係を深めることができるようにポートフォリオを活用し、幼児・保護者・教師が共に育ち合える評価となることを重点として研究を進める。

(3) 研究内容

- ① 評価とは何かの共通理解
- ② ポートフォリオを活用した評価の取り組み
 - ・ 幼児のありのままの姿を捉え、幼児理解につなげる
 - ・ 幼児、保護者と共有できる記録
 - ・ PDCAサイクルからの工夫と改善
- ③ 「こんなことあったよボックス」の取り組み
- ④ ポートフォリオの活用について保護者アンケートを実施

(4) 成果と課題

幼児の姿を記録し、可視化することで、子ども達は自分が認められる喜び、友達と認め合う関わりから自信をもって行動するようになった。保護者は子どもを認め、子どもとの関わりが増え、教師へ思いを伝えやすくなっている。教師自身、取組みを通して、幼児を見る目が養われ幼児理解を深めることにつながっている。研究を通して、幼児・保護者・教師が互いに育ち合っていることが見えてきた。今後の課題は、活動のねらいをさらに意識したポートフォリオの作成や、職員間での情報共有から意見交換へ発展していけるような環境の工夫、一人一人のポートフォリオに記録された育ちを次年度の保育や小学校へも子どもの姿として要録に反映できるようにしていくことである。

2 研究協議内容

視点① 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにするためには、日々の保育の記録等やその活用について、どのような工夫が必要か。

- ・ ポートフォリオを活用することで、職員間で他クラスがどのような活動をしてどのように過ごしているのか等、目で見て理解することが出来、園児の共通理解につながっている。また、友

達同士での気付きにも繋がり、遊びを振り返り、会話のきっかけにもなっている。

- ・写真を活用することで、10の姿を捉えた掲示をするなど、遊びが学びになっているという部分のPRにもなり、活動の様子が保護者にも伝わりやすくなっている。
- ・写真の見取りから支援策、援助の在り方などを検討するなど、園児の捉えにも繋がっており、様々な職員からの助言も貰いやすい。
- ・日々の記録に加えて、各園でも個人記録に取り組んでいる。その個人記録をもとに、必要に応じて、職員全体で話し合いを行う機会も持っている。そのことで、違う視点や指導の在り方、工夫についても様々な意見が聞ける機会となっている。

視点② 評価の妥当性や信頼性が高められるようにするためには、各幼稚園においてどのような工夫が必要か。

- ・ポートフォリオの活用で保護者にも活動そのものが見え、友達関係がどうなっているのかがよくわかり、安心感にも繋がっている。そのことで、教師とも信頼感が保たれる。

視点③ 幼児の発達の状況を次年度又は小学校等に適切に引き継がれるようにするためには、どのような工夫が必要か。

- ・事前の引継ぎは行っているが、実際、受け入れてから気になる部分が出てくることが多く、就学後の情報交換や意見交換の機会も設けるようにしている。
- ・配慮が必要な子の情報交換だけでなく、やはり、入学後、教師の視点、学校側での個の見取りをしていく中で、改めて、1学期を終えたあたりでの情報交換が出来るとまた違った視点で援助や配慮をしていけるのではないかと思う。

3 指導助言より

● 助言者 平塚市港こども園長 松田 節子

① 提案内容について

- ・全職員で全園児を見るという姿勢、担任だけではなく他クラスの教師が情報を提供する。子どもの様子を様々な視点から、多面的に捉え、幼児理解を深めていく姿勢は、大変すばらしい取り組みである。
- ・研究内容の中にある写真の撮り方やコメントの書き方についての取組は、写真が得意、不得意な教師、そしてコメントがうまく入れられないなどの場面で、それぞれがその写真やコメントを共有できることや参考にできることで、それぞれの視点を持つことが出来、評価の妥当性や信頼性に繋がるものである。

② 協議内容において 今後の視点について

- ・個人のポートフォリオをドキュメンテーションし、職員間で共有することが、子どもたちの自己肯定感につながる。そのことは、保護者、教師が一体となって取り組んでいる結果が子を育て、教師を育て、保護者も育つ相乗効果へと繋がっている。

③ 分科会全体を通じて

- ・時間を有効に使うということは各園の課題となっている。話し合いの時間をどう作っていく

かは大きな課題である。その中で、今回の提案にもあった、「こんなことあったよBOX」を箱の中ではなく、職員室などスペースがとれるところに設置して、いつでも教師が活用できるようにし、共有化を図っていくことなど工夫していくことが大切である。

- ・幼児の姿を理解することは、職員一人一人が意識して取り組む事が大切であり、園全体で考えてカリキュラム・マネジメントを適切に実施していくことが大切である。

第2分科会 ＜協議主題4＞	障害のある幼児などへの指導や、障害のある幼児児童生徒との「交流及び共同学習」の推進について
------------------	---

1 提案内容 提案 秦野市立ひろはたこども園 保育教諭 荒木 絵里子

(1) 研究主題のとらえかた

幼児は、生活や遊びなど様々な人との関わりや体験を通して、共に尊重し合いながら園生活を過ごしている。保育教諭は、幼児の特性や良さを理解し、共感的なまなざしが大切である。

特別な支援を必要とする幼児への指導にあたっては、発達段階に応じた生活しやすい環境や関わりを工夫し、職員間で共通理解をする必要があり、そこで、幼児のエピソード記録や、週の指導計画に個々のねらいを立案することで、個に応じた支援の在り方を見直し、集団での関わりの中で個々の発達を捉えることができるのではないかと考えた。当園での交流及び共同学習は、思いやりや優しさ、いたわりの心が育つこと、また、活動を共にすることで生活経験を広げる機会とし、集団生活を通して社会性を育むことが出来ることを目的とする。実施する際は事前に打ち合わせを行い、互恵性のある活動を取り入れ、双方の育ちや学びの場となることを共同学習と捉えた。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ・特別な支援を必要とする幼児の保育のあり方を探る。
- ・「交流及び共同学習」を見直しながら実践し、多様な学びの場を充実させていく。

(3) 研究内容

- ①特別な支援を必要とする幼児の保育のあり方を探る。
 - ・5領域を踏まえ、個々のねらいに基づいた指導計画の様式の検討をする。
 - ・エピソード記録から幼児理解を深める。
 - ・保護者、関連機関との連携を図り支援に生かす。
- ②「交流及び共同学習」を見直しながら実践し、多様な学びの場を充実させていく。

(4) 研究の成果と課題

＜成果＞

- ・エピソード記録から、子どもの姿と幼児との関わり、保育教諭の読み取りや関わりの方の可視化、内面の理解をすることができ、幼児の見方や気づきが深まり、幼児理解につながっている。
- ・指導計画の作成から個々のねらいを立案することで、年齢にとらわれず、環境設定や言葉かけ、関わり方などの工夫ができ、個に応じた支援につながっている。

- ・話し合いを通して、多面的な幼児理解から環境構成や支援の再構築ができ、職員全体で共通理解、連携につながっている。
- ・こども園での多様な関わりの体験を重ね、その中で、自分で考え選択し、決めていくことの自己発揮、その姿を互いに尊重し合い、自己肯定感へとつなげていきたい。

<課題>

- ・異年齢の交流では、共に学び、育ち合うための環境構成や指導計画の見直しをする。
- ・小学校との交流では小学校の担当教諭と年間計画を踏まえ交流及び共同学習のあり方を探る。
- ・幼児の生活に関係の深い様々な人と触れ合う体験を積み重ねることで生活の場を広げ、学びをより豊かにする。
- ・小学校との交流では小学校の担当教諭と年間計画を踏まえ交流及び共同学習の在り方を探る。
- ・幼児の生活に関係の深い様々な人と触れ合う体験を積み重ねることで生活の場を広げ、学びをより豊かにする。

2 研究協議内容

視点① 一人一人の障害の状態等により、生活上などの困難が異なることに留意しながら、個々の幼児の障害の状態等に応じた適切な指導を行うためには、どのような工夫が必要か。

- ・一人一人の特性を理解した上で、クラスだけではなく園全体の共通理解が必要である。話し合いの時間を確保することが課題であるが、ケース会議の中で付箋協議等を活用したり、専門機関・巡回相談からのアドバイスを生かしたりしていきながら、情報を共有し教師間のかかわり方を統一していくことが大切である。
- ・一人一人の特性の違いからクラス運営が難しい状況や保護者になかなか理解を得られないこともあるが、保護者に子どもの困り感や専門職からの話を伝えていくことで理解を得るなど専門機関を有効活用していきながら、保護者との連携を図っていく。
- ・日誌の記入の仕方や様式など各園の課題となっていたが、発表園の指導計画や週日誌の様式から個々の発達に即したねらいや具体的な手立てが明確になった。個々の状態に応じた適切な指導を行うために指導計画や週日誌を見直していく必要がある。

視点② 障害のある幼児児童生徒との「交流及び共同学習」について、どのような実施上の工夫が必要か。

- ・異年齢児、居住地交流など様々な人との交流は、障害のある幼児にとってメリットがある。その際には、肯定的な言葉がけをしていき過度の支援をしすぎないように、一歩引いたところから見守ることが必要である。
- ・子ども同士のかかわりは、障害のあるなしにかかわらず、とても自然に上手くかかわることができている。周りの幼児が障害のある幼児や教師のかかわり方をよく見ている。交流活動を通して、教師が意識した働きかけをしながら人と人とのかかわりを大切にしていく。

3 助言指導より

●助言者 秦野市立しづさわこども園長 府川 宏子

① 提案内容について

- ・特別な支援を要する幼児のエピソード記録や付箋協議を活用したケース会議では、全職員が幼児の姿を共有し、その子の言動を多面的に捉え、読み取ることができた。今後、定期的ケース会議を実施するには、ケース会議の持ち方が課題である。
- ・達成しやすい目標のスマールステップを立てるために指導計画・週日誌の様式を見直したことは、5領域を踏まえての目標となるよう工夫されていた。ねらいが達成できたか、毎日評価し、次につなげていくPDCAサイクルが行われていることはとても良い。何度も成長を捉え直し、より具体的な支援を行い、幼児の育ちを支えてほしい。
- ・専門機関との連携では、巡回相談や特別支援学校の先生などのアドバイスを保育に生かし、発達やその障害の特性を理解して、幼児の育ちにつなげている。交流では、こども園のメリットを生かした異年齢交流や校種間・地域交流を通して、様々な人々とのかかわりからの学びを大切にしていた。

② 協議内容において 今後の視点について

- ・事実や結果だけで捉え評価するのではなく、その子を肯定的に受け止め理解することが大切である。集団生活の中で、子ども同士がお互いを知り、認め合う関係を育てることも大切である。
- ・保護者の悩みや思いに寄り添い、園と一緒に取り組み、幼児の成長を共有していくことで、保護者とのより良い関係を作っていくことが求められる。
- ・校種間や地域との間で、連絡調整を図りながら交流活動を進めていき、情報の共有や連携の充実を図っていく。

③ 分科会全体を通じて

- ・幼児が将来において、自分の良さや可能性を認識しながら、社会の中で価値ある存在として生活できる育ちにつながるよう期待する。

第3分科会 ＜協議主題6＞	幼稚園における教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動について
------------------	------------------------------------

1 提案内容 提案 大師幼稚園 副園長 勝浦 芳子

(1) 研究主題のとらえかた

- ①教育課程に係る教育時間終了後に行う教育活動を私立幼稚園として、どのように工夫していくか。
- ②長時間保育における子どもへの配慮、保護者対応についてどう考えるか。

(2) 研究の方法及び研究の重点

- ①教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画の作成に当たっての教育課程に係る教育時間内の活動をどのように考慮するか。
- ②教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動において、地域の様々な資源を活用しながら多様な活動が出来るようにする為には、どのような工夫が考えられるか。

(3) 研究内容

- ・ただ預かるのではなく、教育時間外保育も大切な教育時間と考える。
- ・領域遊びを中心とした活動を取り入れ、教育時間内保育とは違った視点から、個々のリズムに合わせた活動を重視する。教師が教え導くのではなく、子どものやりたいという気持ちを尊重する。縦割り保育実施により個々の慈しみの心（人への思いやり）を育てる。
- ・毎日、活動内容に変化を持たせ、子ども達が充実感や満足感を味わうことにより思考力や想像力が培われるよう工夫する。
- ・集団生活の中で、役割を果たすことで社会性や協同性を育てる。
- ・教育時間内の対象児の健康状態、各学年の保育内容の把握や確認を行い、活動を充実させる。
- ・地域の様々な資源を生かした保育として、所在地環境に合わせた活動、伝統文化等を利用し、日ごろ体験できない活動を取り入れる。

(4) 研究成果と課題

- ・利用対象児の健康状態を把握し、個々の生活に合わせた活動計画を立てているので、無理が無く、子ども達が、楽しい時間を過ごすことができている。
- ・教育時間外保育を単独活動ととらえず、教育時間内保育の延長と考え、円滑な保育を行っている。
- ・クラス担任との情報共有を密にし、教師主導の保育ではなく、子ども達が、主体的、協同的、発展的な活動（領域遊び）を行うことにより、子ども達の成長を向上させることができている。
- ・ただ預かるだけではなく、毎回豊富な教育的活動を行うため、対象児並びに保護者にとって安心して預けることができると感謝されている。
- ・子どもの育ちは、家庭での生活と教育（躰）が大切であることを相互理解し、協力し合える環境の構築を図ることが重要と考える。
- ・長時間の時間外保育実施は、保護者が、子育てを幼稚園に依存する傾向を助長してしまわないよう保育の趣旨を伝え、家庭との連携を取る必要がある（幼稚園の保育園化の懸念）。
- ・教育時間外保育実施に当たっては、今後も研鑽を積み質の向上に努めていきたい。

2 研究協議内容

視点① 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画の作成に当たって、教育課程に係る教育時間中の活動をどのように考慮するか。

- ・家庭的にゆったりできるよう一人一人のペースを大切にするなど配慮をすることが必要であり、教育課程に係る教育時間との違いを教師が意識していく。
- ・家庭的な雰囲気の中でゆったりと過ごせるよう環境を整えたり、地域の公共施設を利用したり、地域の行事に参加する中で、様々な人とのかかわりがもてるよう活動を工夫していく。
- ・預かり保育の体制や整備がまだ発展途上の状態である。
- ・教育計画を立案しているところもあるが、各園によって取組の状況に違いがある。
- ・人員不足のため、カリキュラムの立案が難しい。
- ・教育課程時間内の保育と教育時間終了後の保育活動の関連性を高めるためには、情報共有することが大切であるが、話し合いの時間を設けることが難しい。そこで、ボードや付箋などを活用して共有できるように工夫していくことが大切である。
- ・子どもたちの健康と安全について配慮しなければならず、そのためにも一人一人の生活リズム

や生活の仕方が異なることを配慮していくことが大切である。そのためにも各家庭と子どもの状況について情報共有を丁寧に行い、心身の負担を少なく、無理なく過ごせるように環境を整えていくことが大切である。

視点2 教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動において、地域の様々な資源を活かしながら、多様な体験ができるようにするためには、どのような工夫が考えられるか。

- ・地域の人々と連携するなど、地域の様々な人的・物的資源を活用しつつ、多様な体験ができるように工夫していくことが大切である。そのために、園では、地域の特色や行事、施設の事業など園周辺の情報を収集する努力をすることが必要である。
- ・近隣図書館、公民館、電車見学など各園において、地域の資源を活用するよう工夫はしているが、お迎えの時間がそれぞれなので、計画することが難しい。

3. 指導助言より

●助言者 横浜隼人幼稚園 水越 美果 園長

① 提案内容について

- ・子どもの心身状態等一人一人の実情に合った環境を整え、安全で安心できる場の設定を心掛けていく。
- ・教育活動に基づく活動を担当する教師と緊密な連携を図るようすることや充実した無理の無い一日を送ることが大切である。
- ・地域の人々と連携するなど、地域の様々な資源を活用しつつ、多様な体験が出来るようにしていくとよい。
- ・家庭との緊密な連携を図るよう努力し、情報交換の機会を設ける機会を持つなど、共に育てているという意識を高めることが大切である。
- ・適切な責任体制と指導體制を整備した上で行うこと。人員確保、適切な活動、緊急時の体制、教育活動を担うほかの職員と共通理解しておくことが必要である。
- ・預かり保育においてモチベーションをあげる為には、子ども側から発信したものを拾って活動に取り入れるなど、多様な体験活動を取り入れることが大切である。

② 協議内容において 今後の視点について

- ・指導要録への反映、成長の記録として記入すると良い。
- ・大勢、少人数、盛り上がる時間、じっくりする時間など、人間関係や環境の変化などの多様な体験は、見方を変えると違った体験が出来るので、工夫していくとよい。
- ・教育過程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動については、預かり時間、勤務形態、利用定員、日誌の扱い、地域資源の取り入れ方など、各園の実情に合わせて工夫して行っている。

③ 分科会全体を通じて

- ・教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動と、教育課程に係る教育時間中の活動の連携については、担任間で情報共有し、子どもたちが安心して過ごせるよう、また、保者が安心して預かり保育を利用できるよう、時間がない中、工夫して行っているが、今後は、それぞれの教育活動を担当する教師が、合同で研修を行うなど、教育活動を充実させていくためのさらなる工夫が求められる。